

# 大学入試

## 分析と対策

大学入学共通テスト

2026  
令和8年度

# 情報I

学校法人 河合塾  
講師(情報) 加賀 健司

啓林館

# 1 大学入学共通テスト「情報Ⅰ」

## (1) 総括

2年目となる、2026年度の大学入学共通テスト（以下、共通テスト）「情報Ⅰ」の本試験では、2025年度と同様の問題構成（大問4題構成で第1問が小問集合、第2問がA・B分け）であり、「情報Ⅰ」で学ぶ四つの領域のうち「コミュニケーションと情報デザイン」「コンピュータとプログラミング」「情報通信ネットワークとデータの活用」の内容を中心に、それらを活用して問題の発見・解決をめざす「情報社会の問題解決」まで幅広く出題された。

大学入試センター発表の平均点は56.59点と、2025年度本試験の69.26点から12.67点下回り、難化した。総マーク数は60で、2025年度本試験の51と比較して増加しており、問題の分量の多さが目立った。平均点が前年度を大きく下回ったことに影響したと思われる。

出題傾向では、2025年度本試験と同様に、「文化祭の来訪者の待ち時間」「桜の開花日の推定」といった受験生にとって身近な題材や、「住民証明発行のための情報システム」といった社会との関わりを意識した題材を取り上げ、「情報Ⅰ」で学んだ内容を活用して問題発見・解決に向けて考察する力を問う問題、「データの活用」では、散布図、箱ひげ図、相関係数などの理解をもとに、与えられたデータについて考察する問題、共通テスト問題作成方針にある「受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象」について情報の科学的理解をもとに考察する力を問う問題（例えば第1問の問2）が出題された。

これらに加え、2026年度本試験では、統計値の理解に基づいてインタフェースのデザインを考える問題や、論理演算子を用いて画像の重ね合わせについて考える問題など、「情報Ⅰ」の四つの領域のうち複数の領域にまたがる内容を扱う問題が出題された。

## (2) 設問別分析

以下のコメント中の正答率は、河合塾「共通テストリサーチ」の結果に基づくものである。また、「上位層」「下位層」は学力レベルを示している（上位層：偏差値55.0以上、下位層：偏差値44.9以下）。

### 第1問 小問集合（配点20点）

第1問はコンピュータの仕組み、情報セキュリティ、

基数変換、インタフェースのデザイン、電子メールの仕組み等に関する小問集合であった。平均正答率は43%。

問1 a コンピュータの仕組みに関する基本的な知識を問う問題。空欄ア・イ（完答）の正答率は28%で、第1問の平均正答率を下回った。

問1 b 情報セキュリティの基本的な知識を問う問題。空欄ウの正答率は31%で、第1問の平均正答率を下回った。42%が誤答の④を選んでいった。

問2 クロスステッチを題材とする、基数変換に関する考察問題（出題例1）。2026年度本試験では、解答用紙が⑥までマークできるものに変更されることから、16進法で表記された数に関する問題が出題されると予想されていた。正答率は、空欄工・オ（完答）が67%、空欄カ～ケ（完答）が28%。学力レベル別では、空欄工・オは、上位層90%、下位層38%、空欄カ～ケは、上位層57%、下位層6%と、上位層と下位層で大きく差が開いた。文理別では、空欄工・オは、文系61%、理系71%、空欄カ～ケは、文系22%、理系33%と文理でも差が開いた。

#### 【変換方法】

変換A：図案の各行を2進法で表して桁を逆順にする。

例 図1の上から1行目と3行目の4マスは、いずれも1000<sub>2</sub>から0001<sub>2</sub>になる。

変換B：図案の全体を16進法で表して桁を逆順にする。

例 図1の図案全体は、8C8F<sub>16</sub>からF8C8<sub>16</sub>になる。

変換C：変換Aを行った後、その結果に対して変換Bを行う。

続いて、小さな図案を組み合わせるより大きな図案を作るため、図3に示すように4×4マスの図案を4枚配置して8×8マスの図案を作ること考えた。図3中の、変換A、変換B、変換Cはいずれも元の図案に対して変換を行った結果とする。35AD<sub>16</sub>で表される図案を元の図案として、図3の方法で8×8マスの図案に拡張したとき、その中央の4×4マス（図3の網掛け部分）の図案を16進法で表現すると、カキクケ<sub>16</sub>となる。

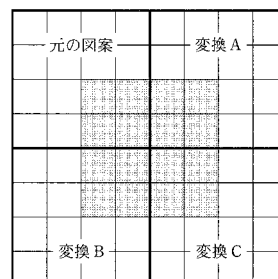


図3 4×4マスの図案を利用して8×8マスの図案を作る方法

### 2026年度大学入学共通テスト 情報Ⅰ 第1問 問2

出題例1

問3 生年の入力で用いられるホイールの入力用インタフェースを題材とした考察問題。情報デザインの問題のように見えるが、統計値についての理解も問われる

点で複数の領域にまたがる問題といえる。正答率は、空欄 **コ** が50%，空欄 **サ** が74%。空欄 **サ** は第1問で最も正答率が高かった。文理別では、文系68%，理系78%と、文理で差が開いた。

問4 電子メールが送信される仕組みに関する考察問題。正答率は空欄 **シ** が49%，空欄 **ス** が32%，空欄 **セ** が10%，空欄 **ソ** が59%。空欄 **セ** は第1問で最も正答率が低く、54%が誤答の⑥を選んでいた。なお、問4 aの配点は空欄 **シ** が1点、空欄 **ス**・**セ** がそれぞれ2点と、差がつけられていた。

## 第2問A 情報通信ネットワークとデータの活用 (配点15点)

第2問Aでは、住民証明発行のための情報システムを題材に、「情報通信ネットワークとデータの活用」の領域から、情報システムとそのサービスに関する問題が出題された。平均正答率は71%。

問1 住民証明(電子データ)を電子的に提出できるようにする情報システムの改良に関する考察問題。空欄 **ア**・**イ** (完答)の正答率は94%と情報Iの問題の中で最も高かった。なお、2026年度本試験で正答率が90%を超える問題は本問を含め2問あり、2025年度の11問に比べて大幅に減少した。

問2 住民証明の変更を防止する情報システムの改良に関する考察問題(出題例2)。空欄 **ウ**~**オ** (完答)の正答率は40%。学力レベル別では、上位層67%，下位層14%と、第2問Aで最も大きく差が開いた。また、学年別では、現役生38%，卒業生52%と、差が開いた。空欄 **ウ** では26%が誤答の③を、空欄 **エ** では21%が誤答の⑦を選んでおり、請求者と役所とのやりとりと同じであると考えた受験生が多かったと考えられる。空欄 **カ** の正答率は59%と、他の空欄と比較して高かった。「請求者が住民証明(電子データ)を変更できないようにするため」というリード文の内容から推測したものと思われる。

問2 次の文章を読み、空欄 **ウ**~**カ** に入れるのに最も適切なものを、後の解答群のうちから一つずつ選べ。

図2に示した情報システムでは、入手した住民証明(電子データ)を請求者が勝手に変更してしまうおそれがある。請求者が住民証明(電子データ)を変更できないようにするために、アクセスコードを利用する方式に情報システムを改良する。

図3に示す情報システムでは、役所は請求ごとにアクセスコードを発行する。アクセスコードを役所に送信することで、対応する住民証明(電子データ)を入手できる。

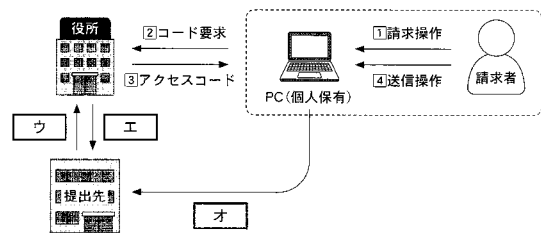


図3 アクセスコードを利用する方式の情報システム

図2の情報システムと異なり、図3の情報システムでは **カ**。

2026年度大学入学共通テスト 情報I 第2問A 問2

出題例2

問3 アクセスコードの漏洩<sup>ろうえい</sup>を防止する情報システムの改良に関する考察問題。問2とは異なり、情報システムの改良に伴って変わった役所の役割について問うている。正答率は空欄 **キ** は85%，空欄 **ク** は88%，空欄 **ケ** は62%。空欄 **ケ** では、22%が誤答の④を選んでいた。確認依頼コードには住民情報が含まれておらず、また、空欄 **ケ** を含む文には「図3の情報システムにおけるアクセスコードとは異なり」とあり、アクセスコードにも住民情報が含まれていないことから、④は誤りである。文脈に即して空欄の内容を考えることができなかつたものと思われる。

## 第2問B コミュニケーションと情報デザイン、コンピュータとプログラミング (配点15点)

第2問Bでは、画像の編集を題材とした問題が出題された。画像のデジタル化は「コミュニケーションと情報デザイン」の領域で学ぶ事柄だが、OR演算とAND演算の結果から、それらの演算によって起こる画像の変化を理解する必要がある点で「コンピュータとプログラミング」の領域で学ぶ事柄についての理解も求められ、複数の領域にまたがる問題といえる。平均正答率は53%。

問1 2進法で表記された二つの数値について、ビットごとにOR演算を行った結果を求める考察問題。正答率は、空欄 **コ** が80%，空欄 **サ** が85%。学力レベル別では、空欄 **コ** は上位層97%，下位層55%と、大きく差が開いた。

問2 画像の重ね合わせに関する考察問題。空欄 **シ** の正答率は30%で、第2問Bで最も正答率が低かった。誤答の選択率をみると、①15%，②28%，③24%となっており、ある点の数値を具体的に設定して、十

分な検討をすることなく、あて推量で選択肢を選んだものと考えられる。

問3 256階調のグレースケールの画像から得られた各階調のヒストグラムをもとに、背景に相当する階調の範囲を選択する考察問題。空欄 **ス** の正答率は57%。学力レベル別では、上位層82%、下位層32%で、第2問Bで最も大きく差が開いた。文理別では、文系51%、理系62%で、第2問Bで最も大きく文理の差が開いた。また、17%が誤答の①(背景ではなく熊を示す範囲)を選んでおり、そもそもヒストグラムと画像との関係性についての理解が不十分であったと思われる。

問4 画像の一部を切り抜いて別の画像に重ねる際に必要な操作についての考察問題(出題例3)。

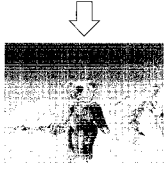


図13 風景画像に別の画像の一部を合成する手順

タ の解答群

① AND 演算	④ OR 演算
② AND 演算の後に NOT 演算	③ OR 演算の後に NOT 演算

2026年度大学入学共通テスト 情報 I 第2問B 問4  
出題例3

正答率は、空欄 **セ**・**ソ**(完答)が45%、空欄 **タ**が34%、空欄 **チ**が42%。一見すると複雑な手順を経ているように見えるが、問1~3で取り組んだ内容を正しく理解できていれば正解できる。しかし、空欄 **チ**では、46%が誤答の①を選んでおり、内容を理解できていないまま見た目を選んでいいる可能性がある。AND演算やOR演算は多くの受験生にとって決して難解なものではないと思われるが、画像編集という題材の中で問われると、難しく感じたようである。学んだ事柄がどのような場面で活用できるかを普段から意識しておくことが重要といえる。

### 第3問 コンピュータとプログラミング(配点25点)

第3問では文化祭の来訪者の待ち時間を題材に、「コンピュータとプログラミング」の領域から、アルゴリズム、変数、配列、条件分岐、反復に関する問題が出題された。シミュレーションを含んでいる点で、2025年度本試験や2022年公表の「令和7年度大学入学共通テスト 試作問題『情報I』(以下、試作問題)」とは異なる特徴を持つ問題といえる。全体正答率は59%、学力レベル別では、上位層82%、下位層36%。文理別では、文系54%、理系63%であり、上位層と下位層の差、文理の差のいずれも、四つの大問の中で最も大きかった。

問1 待ち時間を求めるためのアルゴリズムに関する考察問題。正答率は、空欄 **ア**・**イ**・**ウ**(完答)が87%、空欄 **エ**が83%、空欄 **オ**が82%。モデル化のルールに基づいて具体的に考える問題は2025年度も出題されており、十分な練習がなされていることが、正答率の高さにつながっていると考えられる。また、アルゴリズムを文として表現する作業についても多くの受験生が正確にこなすことができているといえる。

問2 配列や関数の理解に基づいてプログラムを作成する考察問題。正答率は、空欄 **カ**・**キ**(順不同)

問4 次の文章を読み、空欄 **セ** ~ **チ** に入れるのに最も適切なものを、後の解答群のうちから一つずつ選べ。

ポスターやパンフレットなどで、風景画像(図12左)に別の画像の一部分(図12中央の熊の部分)を切り抜いて重ねられたような合成画像(図12右)を見ることがある。

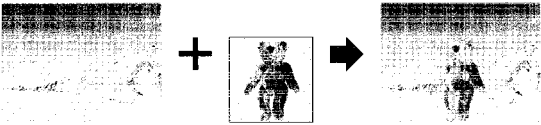






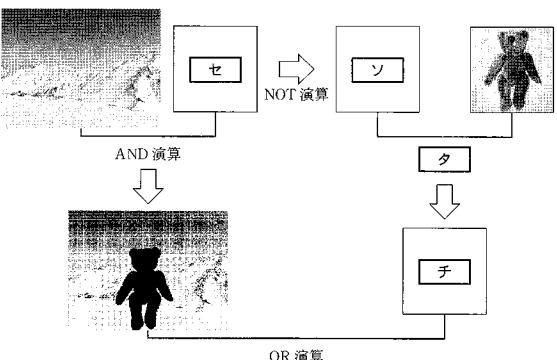


図12 熊の部分のみ風景画像に合成する様子

このように、画像の一部分を切り抜いて別の画像に重ねるには、背景の部分(ここでは図12中央の熊以外の部分)を透過させる必要がある。これは、図13で示した手順でビット演算を組み合わせれば実現できる。なお、ここでは、黒色の点の値は00000000<sub>2</sub>、白色の点の値は11111111<sub>2</sub>とする。

セ・ソ・チ の解答群

①  背景: 黒	②  背景: 白	③  熊: 黒
④  背景: 白 熊: 黒	⑤  熊: 白	⑥  背景: 黒 熊: 白



AND 演算

NOT 演算

OR 演算

が76%・66%，空欄 $\square$ クが65%，空欄 $\square$ ケが55%，空欄 $\square$ コが53%。学力レベル別では，空欄 $\square$ クは上位層93%，下位層32%，空欄 $\square$ ケは上位層86%，下位層25%，空欄 $\square$ コは上位層79%，下位層29%であり，上位層と下位層とで50～60ポイントの差が開いていた。文系と理系との間でも10ポイント程の差があり，問3につながる問題という点でも，第3問全体の出来・不出来に大きな影響を与えたといえる。先に確認した通り，問1の空欄 $\square$ エ，空欄 $\square$ オを含む文はほとんどの受験生が理解できているのだが，これをプログラムとして表現することができないのは，配列や関数についての理解が不十分であるためと考えられる。

**問3** 最長待ち時間を求めるために検討対象すべての状況についてシミュレーションを行い，さらにプログラムの改良を試みる考察問題（出題例4）。

問3 次の文章を読み，空欄 $\square$ サ・ $\square$ シに入れるのに最も適当なものを，後の解答群のうちから一つずつ選べ。また，空欄 $\square$ ス・ $\square$ セに入れるのに最も適当なものを，図3の①～④のうちから一つずつ選べ。空欄 $\square$ ソにはまる数字をマークせよ。

Yさんは，昨年の様子から来訪者を10分以上は待たせられないと考え，最も長く待たされる来訪者の待ち時間(以下，最長待ち時間と呼ぶ)が10分未満となる体験時間を調べるプログラムを作成した(図3)。

```

(01) Touchaku = [0, 3, 4, 10, 11, 12]
(02) kyakusu = 要素数(Touchaku)
(03) taikenを1から15まで1ずつ増やしなが繰り返す:
(04)   Kaishi = [0, 0, 0, 0, 0, 0]
(05)   Shuryou = [0, 0, 0, 0, 0, 0]
(06)   Shuryou[1] = taiken
(07)   iを2からkyakusuまで1ずつ増やしなが繰り返す:
(08)     Kaishi[i] = 最大値(  $\square$ カ,  $\square$ キ )
(09)     Shuryou[i] =  $\square$ ク
(10)   saichou = 0
(11)   iを1からkyakusuまで1ずつ増やしなが繰り返す:
(12)     saichou = 最大値(  $\square$ サ,  $\square$ ケ -  $\square$ コ )
(13)   もし  $\square$ シ ならば:
(14)     表示する("体験時間", taiken, "分間:",
                  "最長待ち時間", saichou, "分間")

```

図3 最長待ち時間が10分未満となる体験時間を調べるプログラム

2026年度大学入学共通テスト 情報I 第3問 問3  
出題例4

正答率は，空欄 $\square$ サが41%，空欄 $\square$ シが52%，空欄 $\square$ スが40%，空欄 $\square$ セが45%，空欄 $\square$ ソが20%であった。学力レベル別では，空欄 $\square$ サは上位層74%，下位層18%であり，上位層と下位層で大きく差が開いた。空欄 $\square$ シでは26%が誤答の①を選んでい

た。これは「最長待ち時間を求め，10分間未満ならば体験時間と最長待ち時間を表示する」という条件を理解できていないためと考えられる。また，空欄 $\square$ スでは24%が誤答の①を，空欄 $\square$ セでは25%が誤答の①を選んでいて。これらの問題は，図3で与えられているfor文を，while文で表現するとともに，その際に初期値をどこに挿入するかを問うものであり，2025年度本試験や試作問題にはなかったものである。この点で，多くの受験生が戸惑ったと考えられる。プログラムを学ぶ際に，コードを書き写すだけではこのような問題に対応することは難しく，基本的な文法の正確な理解と運用能力を実践的に養っていくことの必要性を示す問題といえる。空欄 $\square$ ソの正答率は全設問中で最も低かった。本問のプログラムを丁寧にトレースするのは多くの受験生にとって難しかったと思われる。

なお，問2と問3では現役生と卒業生との正答率の差が9～20ポイントあった。良質な演習問題を積み重ねることでプログラムの問題に対応できる思考力を鍛えることができることを示唆している。

**第4問 情報通信ネットワークとデータの活用 (配点25点)**

第4問ではオープンデータを用いて桜の開花日を予測するという題材で，「情報通信ネットワークとデータの活用」の領域からデータの表現，データの収集と管理，データの分析と評価に関する問題が出題された。第4問の平均正答率は70%であり，第2問Aとともに，正答率の高い問題であった。

**問1** オープンデータや欠損値など基本的な知識問題。正答率は，空欄 $\square$ アが56%，空欄 $\square$ イが89%，空欄 $\square$ ウが88%。空欄 $\square$ アでは，41%が誤答の①を選んでいて。これはB「オープンデータを加工・編集する場合には，利用申請が必須である」を正しいと理解したものである。オープンデータの「活用」は「情報通信ネットワークとデータの活用」の領域で扱う事柄だが，オープンデータの「条件(二次利用など)」は「情報社会の問題解決」の領域で扱う事柄である。この点で，第4問は複数の領域にまたがる問題であったといえる。「情報社会の問題解決」の領域は他の領域とは位置づけがやや異なることもあり，ともすると軽視されがちだが，このことが正答率の低さにつながっているのかもしれない。一方，統計値に関する基本的な理解を問う空欄 $\square$ イや，データの表現を

問う空欄 **ウ** の正答率は高く、多くの受験生がしっかりと勉強していることが伺われた。

問2 二つの仮説に基づく開花推定日と実際の開花日との差を算出するとともに、そのデータの解釈を問う考察問題。正答率は空欄 **エ**・**オ** (完答) が75%、空欄 **カ** が91%。2026年度本試験では正答率が90%を超える問題は2問あったが、そのうちの一つがこの空欄 **カ** であった。

問3 aは緯度と開花差の散布図と相関係数から読み取れることを判断する考察問題、bは箱ひげ図を解釈したり、開花推定日と開花日が一致している観測点の数を判断したりする考察問題であった。正答率は、aの空欄 **キ**・**ク** (順不同) が76%、79%、bの空欄 **ケ** が74%、空欄 **コ** が77%、空欄 **サ** が54%。いずれの問題も高い正答率を示しているが、空欄 **サ** では28%が誤答の①を選んでいて、一致観測点は開花差が0の軸上にある○に対応する観測点であり、図1からは、そのような観測点があることはわかる(すなわち空欄 **コ** は①)が、この点がG<sub>1</sub>とG<sub>2</sub>のどちらのものであるかは、図1からは判断できない。そこで図2から判断することになるため、空欄 **サ** は③となる。このような考察の過程は図2の下に文章として記されているのだが、空欄 **サ** で誤答の①を選ぶのは、図1と図2の内容を関連づけて文章を理解し、考察することが、受験生にとって難しいことを示唆している。

問4 回帰分析を用いたデータの補正に関する考察問題(出題例5)。空欄 **シ** の正答率は27%で、この大問で最も低かった。上位層でも正答率が33%であったことから、かなりの難問であったと推測される。22%が誤答の①を、28%が誤答の③を選んでいて、実質的にはほぼあて推量で選択肢①、②、③のいずれかが選ばれていたことが推測できる。空欄 **ス** の正答率は52%であった。観測点Xの400度補正日を算出するものであり、正答率が高かったことから、補正方法については理解できた受験生が多かったと思われる。一方で、空欄 **シ** の正答率の低さを考えると、補正方法はある程度理解できていても、選択肢の文言を理解すること自体が難しかったのかもしれない。空欄 **ス** の誤答では、20%が誤答の②を選んでいて、「実際の開花日が4月12日だったことから、この年の観測点Xではうまく補正できた」という文に基づいて、そのまま②4月12日を選択したものと考えられる。

問4 次の文章を読み、空欄 **シ**・**ス** に入れるのに最も適当なものを、後の解答群のうちから一つずつ選べ。

Tさんは、氷点下観測点の開花推定日を補正できないかと考えた。

1年間のデータだけでは足りないと感じたTさんは、ある3年間の気象データを用いて、まず、各年の気象データから氷点下観測点を抽出し、2月1日以降に平均気温が氷点下であった日数(氷点下日数)を数えた。次に、抽出された3年分の氷点下観測点について、氷点下日数と400度開花差の散布図と回帰直線(図3)を作成した。なお、回帰直線の方程式は、次のとおりである。

$$(\text{開花差の予測値}) = 0.55 \times (\text{氷点下日数}) + 5.48$$

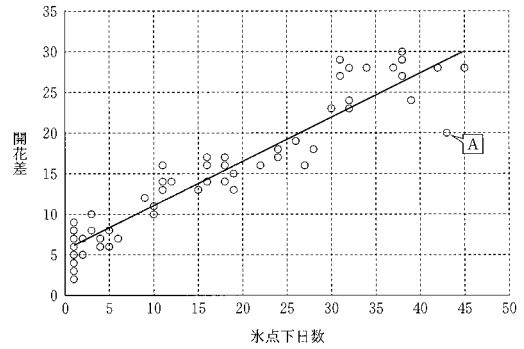


図3 氷点下日数と400度開花差の散布図と回帰直線

Tさんは、開花差の予測値の小数第1位を四捨五入した値(補正日数)を用いた次の補正方法により、実際の開花日に近い補正日(400度補正日)が得られるのではないかと考えた。ただし、補正日数が負の値の場合は、補正しないことにした。

**補正方法**

400度開花推定日から補正日数分さかのぼった日を400度補正日とする。

400度開花推定日より400度補正日の方が実際の開花日に近くなることを「うまく補正できる」とする。Tさんは図3から、**シ** ことがわかった。

さらに、Tさんは新たに別の年のデータを取得し、この補正方法を試した。観測点Xにおいて、400度開花推定日が4月23日、氷点下日数は18日であった。これより、観測点Xの400度補正日は**ス** と計算できた。実際の開花日が4月12日だったことから、この年の観測点Xではうまく補正できた。

**シ** の解答群

- ① すべての氷点下観測点でうまく補正できる
- ② 散布図上にある点Aで示した氷点下観測点を除いたすべての氷点下観測点でうまく補正できる
- ③ 氷点下日数が1日である氷点下観測点の一部を除いたすべての氷点下観測点でうまく補正できる
- ④ 回帰直線上または回帰直線よりも上側に点がある氷点下観測点だけうまく補正できる
- ⑤ 回帰直線上または回帰直線よりも下側に点がある氷点下観測点だけうまく補正できる

**ス** の解答群

- ① 4月5日
- ② 4月8日
- ③ 4月12日
- ④ 4月15日

2026年度大学入学共通テスト 情報I 第4問 問4

出題例5

(3) 学習対策

2026年度本試験では、2025年度本試験と同様に「情報I」で学ぶ四つの領域から幅広く出題されていた。この傾向は2027年度以降も続くと想定されるため、苦手

な分野を作らないようにすることが重要である。

また、(1) 総括で述べたように、平均点の変化から、2026年度の問題は2025年度に比べて難化したといえるが、この難易度が2027年度以降も続くのかは予想できない。そのような状況の中、対策の要点として以下を挙げておきたい。

### ① 情報の科学的理解に基づく考察問題への対応

情報の科学的理解に基づく問題の発見・解決は、「情報I」で特に重視されており、この点は第1問の問2や第2問Bに特に強く反映されている。ここでの「科学的理解」とは、単に基数変換や計算問題が解けるようになるという意味ではなく、情報技術を使って問題の発見・解決に向けた判断ができるようになるための原理・仕組みの深い理解という意味である。受験生の勉強時間で、取り組むことのできる演習量は限られている。「1を解いて10に活かす」ことをめざすために、理解の質を高めることを促したい。

### ② 複数の領域にまたがる問題に対応する力の養成

(2) 設問別分析でも述べたとおり、2026年度本試験では複数の領域にまたがる問題がみられた。領域ごとに分割して学習を進めるだけでなく、各領域のつながりを意識し、学んだ事柄を体系化していくことが重要である。①で示した「情報科学の根底にある原理・仕組みの理解」は、学んだ事柄をつなぐ糸となり、体系化を促すことになるはずである。プログラムの問題を解く＝読むだけでなく、実際に書いてみる（そして失敗し、デバッグする）経験を積むことは、第3問に対応するうえで、迂遠に見えるが最も有効な対策であろう。

### ③ 限られた時間で多くの分量の問題を解く力の養成

2026年度本試験ではマーク数が60であったこともあり、問題の分量の多さが目立った。受験生の負担感は大きかったであろう。このような分量の多さに対応するには、問題文や図表・資料で与えられた設定や条件からすみやかに「問題発見・解決の状況を読み解く力」、「解答に必要な情報を正確に読み取る力」が必要となる。ただし、このような力の根本も、①で示した「情報科学の根底にある原理・仕組みの理解」である。知識の理解の質を高めるとともに、知識を活用する力を養うための演習（身の回りで活用されている情報技術への興味関心の喚起を通し）、習得した事柄を他の場面に応用する視点の養成、といったことが、効率の良い対策につながる。2025年度本試験の出題内容や平均点により「情報は勉強しなくても何とかなる」といった、ある種の誤解が受験生の間でもあったようだが、2026年度本試験を受け

て「対策しないとできない」、「対策すればできる」という考えを受験生に促し、効果的な学力アップにつなげていきたい。

#### 加賀 健司（かが・けんじ）

教科「情報」をはじめとして、小論文や生物まで幅広く活躍。教科「情報」では、全統共通テスト模試の作成チーフを務めるとともに、高3生・卒業生を対象とした教材の作成や、共通テスト対策講座の授業を担当している。



— 知が啓く。 —

啓林館

URL <https://www.shinko-keirin.co.jp/>

令和8年 内容解説資料

本 社	〒 543-0052	大阪市天王寺区大道4丁目3番25号	電話(06)6779-1531	FAX(06)6779-5011
東京支社	〒 113-0023	東京都文京区向丘2丁目3番10号	電話(03)3814-2151	FAX(03)3814-2159
北海道支社	〒 060-0062	札幌市中央区南二条西9丁目1番2号サンケン札幌ビル1階	電話(011)271-2022	FAX(011)271-2023
東海支社	〒 460-0002	名古屋市中区丸の内1丁目15番20号ie丸の内ビルディング1階	電話(052)231-0125	FAX(052)231-0055
広島支社	〒 732-0052	広島市東区光町1丁目10番19号日本生命広島光町ビル6階	電話(082)261-7246	FAX(082)261-5400
九州支社	〒 810-0022	福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階	電話(092)725-6677	FAX(092)725-6680